

氏名	木下富雄 きのしたとみお
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第141号
学位授与の日付	昭和55年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	流言の研究

論文調査委員 (主査) 教授 本吉良治 教授 中久郎 教授 辻村公一

論文内容の要旨

流言といえ、これまでとかく異常で獐猛な社会的病理現象と見られがちであったが、実は私たちにあって最も身近で、ありふれた社会現象にすぎないというのが本研究の出発点である。すなわち、人びとの耳目を驚かせ新聞種になるような大規模なものだけが流言の全てではなく、私たちが日常生活の中で交しているなにげない噂話も、流言の一形態にほかならないのである。結局、流言も、人間が営む数々の社会的コミュニケーションの一分野として、なんらかの意味で成員相互に影響を与えあう手段であり、事態についての情報を交換しあって、相互に適応を得ようとする心理的・社会的過程といえよう。

本研究ではこのような立場から、まず流言が流言たるゆえん、つまり数ある社会的コミュニケーション現象の中で、流言がいかなる点において特徴づけられるのかが論じられた。ついで流言としばしば混同される現象としてデマとの区別が指摘され、さらに流言現象を根元的に理解するためには、人びとの相互作用のうちに伝達が行われるという意味で類似の現象である流行やインノベーションの拡張、さらには伝承などと共に、これらをコミュニケーション・フローという概念のもとに包括的に論じられる必要性のあることが述べられた。

本論文は、このあと流言現象をその発生の機序、伝達の機序、変容の機序の3つの側面に分け、それぞれにかかわる要因の作用と相互作用を明らかにすると共に、これらの現象を説明するモデルを提出する。

(1) まず流言発生の機序であるが、流言が生じるためには、当然のことながらいくつかの内的・外的条件を必要とする。内的条件とは、どのような動機のもとに人びとが流言を産み出し、受入れるのかという个体側の条件であり、外的条件とは、こうした動機がいかなる状況のもとに触発され促進されやすいかという、集団的・社会的な条件である。

前者に関しては、主題への興味や関心、認知的あいまいさ、個体の欲求や感情、性格、それに批判能力といった要因の存在が考えられ、それぞれの作用の仕方が、筆者の一連の実験ならびに社会調査資料によって検討された。一方、後者の要因に関しては、流言集団の存在、社会的危機、物理的・社会的制約に基づく情報の不足という要因の存在が指摘された。

(2) 流言研究の第2の側面は、流言の伝達に関する問題である。最初に述べたように、流言も結局なんらかの意味で、ある個体が他の個体に影響を与えようとする心理的・社会的過程である以上、そこに誰から誰へという、人間関係の選択が行われるのは当然といえよう。この選択は、人びとが関係する集団や社会のさまざまな構造的・機能的特徴に基づいており、流言の流れる方向、大きさ、速度などは、ほぼそれによって決定される。具体的には、集団や社会の中における流言集団の存在、対人関係のネットワーク、凝集性、階層的構造、生態学的な構造などが、流言の伝達形態を支配しているようで、これらの要因の作用が、筆者自身の実験・調査をもとに明らかにされた。

また、このような要因の個別的分析の成果を踏まえ、要因相互の構造的関係や、要因の相対的重みを決定するために、多変量解析が行われた。その結果、個々の流言によって要因の作用力は異なること、しかしながら、個別的な流言現象を通じて重みを持つという意味でより基礎的な要因と、個別的な流言現象に著しく規定されるという意味で特殊な要因が分離されうること、そしてこれらの関係の中から、要因の階層的構造が考えられることなどが明らかにされた。

(3) 流言現象の第3の側面は、その変容の過程である。流言は、伝達途上、さまざまな内容の歪曲を伴うのが常であり、流言といえば、デタラメ・インチキという世人の印象は、こうした流言の特性に基づいている。しかしながら流言が変容するのは、伝達の当初ないし途上で、作為的に、悪意でもって操作が行われるためではなく、あらゆるコミュニケーション現象につきものの、恒常的ないしは無作為なノイズやエラーが、伝達途上で発生するからである。

このようなノイズやエラーは、流言伝達のあらゆる過程において発生するが、その中で最も重要なのが、記憶痕跡の変容に基づくそれである。だがこれ以外にも、伝達場面における情報伝達へのモチベーション、伝達者と被伝達者との関係、両者を囲むコミュニケーション・ネットワークなどが、流言の歪曲にかかわりをもっていることが明らかにされた。

(4) 最後に、これまで述べられてきた流言現象を統一的に把握するために、流言現象をモデル化する試みが行われた。

ここで取上げられた立場は、情報処理理論に基づくシステム・モデルとでも言うべきものである。すなわち、1人の個体を1つの社会的情報処理器と見做すことから出発する。するとわれわれが住む社会や集団は、このような情報処理器が多数組み込まれた、ネットワーク・システムと考えることができる。1つの情報処理器の中は、入力回路、変換・増幅回路、出力回路、記憶回路という4つの回路に大別され、そのおのおのの中が、さらにいくつかの装置群に分かれている。受信相手から入力された流言は、この内部で一連の情報処理が施され、その結果を次の送信相手へ出力することになる。

社会の中には、このような情報処理器が一定のサイズと密度をもって分布しており、各処理器の間は、固有の心理的抵抗値をもった回路網によって結合されている。だが回路網はただ1種類だけではなく、人間関係のさまざまな次元や、流言の主題に対する人びとの興味の多様性に応じて細かく分化しており、全体として重層的なネットワーク構造をかたち作っている。

基本的にはこのような発想に基づくモデルが提案され、流言の発生・伝達・変容の過程が、この内部の、また装置間をつなぐネットワークの、いかなる特性との関係において規定されるかが検討された。さらに

モデルに関して、数理モデルとシミュレーション・モデルの功罪が論じられ、現在の段階では後者のアプローチがより有効であり、本モデルもその立場に立つものであることが主張された。

(5) 最後に、本論文で触れえなかった流言現象の側面として流言のシンタックスと、流言のコントロールの問題が指摘された。

論文審査の結果の要旨

本論文の筆者は、従来、ともすれば異常な社会的病理現象と見られがちであった流言現象が、われわれの身近な、ありふれた社会的コミュニケーションの一つの形態にすぎぬという立場から出発する。流言や、うわさ、デマの概念を、筆者は操作的に明らかにしながら、流言の発生、伝達、変容の3側面から検討し、それを通じて、統一的モデルを追求する。

従来の研究が、流言をケース的に取りあげたり、実験室的、あるいは個人心理学的立場からのみ接近したことを考えると、本論文は、流言現象を社会的・心理的接点から、統一的に扱った最初のものである。

以上の新しい見解から、流言現象の研究を可能にしたものは、そこで用いられた手法の巧妙さである。例えば、某銀行の取りつけ事件などのような現実の社会の中に発生した流言現象を社会調査法的手法で分析し、その発生、伝達、変容についての要因を抽出し、ついでそれらの要因の効果を野外実験法によって検討するというやり方である。さらに個別的要因の作用だけではなく、要因相互の構造的関係や相対的重みづけをするために、多変量解析という最近の手法を駆使し、それによって、要因間の階層的構造を明らかにした。注目に価する功績である。

本研究が、流言現象の発生、伝達、変容の3つの側面から統一的に接近しようとしたことはすでに述べたが、そのうち、著者がもっとも力を入れたのは流言の伝達の研究である。流言は社会の不特定多数の中を広がってゆくものと専門の研究者によってさえも考えられてきた。しかし、さきに社会的・心理的接点と呼んだ構造的、機能的特性によって伝達の方向が決定されることを本論文は明らかにした。この点は、独創的方法による価値ある発見であるといえる。

筆者は、流言現象の統一的モデルとして、情報理論にもとづくシステムモデルを作成する。その細部に到っては未完成な部分が多いことは筆者自身の認めるところであるが、しかしその責は、筆者に負わせるというよりは、むしろ社会学と心理学の境界領域に対する研究の未発達さに負わせるべきであろう。

以上審査するところにより、本論文は学位論文として価値あるものと認める。